

「知られざる国セルビア」黒澤 啓

セルビアと聞いて、ロッシーニの歌劇を思い浮かべたり、治安が悪そうな国と思う学生はまだまじなほうで、未だに戦争をしていて危ない国と思う学生も多い。言うまでもなく、ロッシーニの有名な歌劇はセルビアではなくセビリア(スペイン)の理髪師であり、また、ユーゴ紛争は1995年に、コソボ紛争は1999年に終わっており、実は今はたって平穏な国である。もともと、旧ユーゴスラビアを構成する一つの共和国であったが、冷戦終結に伴い1990年代前半にユーゴスラビアが崩壊し、スロベニア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、マケドニア、モンテネグロ、コソボがそれぞれ独立し、現在はセルビア共和国となったものである。

そのセルビアのベオグラードに、2009年10月から2年半、国際協力機構(JICA)の仕事で在勤した。90年代後半に、ユーゴ紛争やコソボ紛争の復興支援のために何度もバルカン地域を訪問したが、私自身セルビアはその時まで行ったことがなく、正直不安であった。紛争状態でないことはわかっているが、長年国際社会では悪者扱いされてきた国であり、私が携わった復興支援も、セルビアに破壊された地域の復興が多かったため、敵地に乗り込むような覚悟でベオグラードのニコラテスラ空港に降り立った。

そもそもニコラテスラが最初は何んのことか全くわからなかったが、紙幣の肖像にもなっているほどのセルビアにとっては偉人であることをあとになって知った。エジソンと並ぶ発明王で、直流のエジソン、交流のニコラテスラと言われ、簡単に言えば、交流の実用化や無線の原理などを発明した人で、遠く発電所から送電線で電気を運ぶことができるようになったのはニコラテスラのおかげだそうである。因みに、電磁波で使われているテスラという単位は、彼の名前から付けられており、理科系出身なら誰でも知っているはずなのだが、私は大学時代、物理が苦手な化学を専攻したので、恥ずかしながら聞いても全く思い出せなかった。

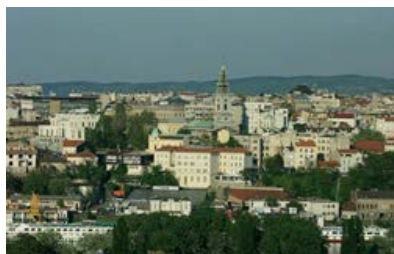
着任後、これから住む家を探している際には、あるアパートでは上のフロアにジョコビッチが住んでいると聞かされたこともあったが、ジョコビッチを知らずありがたみがわからなかったので、結局他のアパートに決めてしまった。あとから聞いたら、男子テニス世界ランク第一位のノバク・ジョコビッチであった。その後いろいろなセルビア人と知り合うたびに、ピクシーは元気かと聞かれ、誰のことかわからなかったのが最初は返答に窮したが、ピクシーこそセルビアでは英雄扱いされている名古屋グランパスのストイコビッチ監督であった。

こうして見ると、セルビアにはそれなりに日本でも知られている人がいることがわかり、親近感を覚え始めるようになったが、さらに驚いたのは、親日的な人が非常に多いことであった。



日本が無償資金協力で供与したバス
(後方に見えるのは、1999年に
NATOにより空爆された軍の参謀本部)

街を歩いていて日本語で「こんにちは」と声をかけられることはしょっちゅうであり、大使館主催で日本の映画祭やコンサートをやるというも多くの人で賑わっていたが、2011年3月の東日本大震災の際には、長年の日本からの援助に感謝し、今こそセルビアが日本に恩返しする番だとして、国内の様々な都市で、チャリティ・イベントや募金活動が行われた。赤十字を通じて集められた義援金の額は、人口わずか700万人のセルビアが、ヨーロッパの中で第1位であった。また、震災直後には、首都ベオグラードの市内広場で被災者をサポートする集会が開催され、日の丸を模した人文字を参加者で作ると共に、日本国旗上に支援メッセージが寄せ書きされ、3月29日、大阪で行われたサッカーのチャリティー試合の会場に掲げられた。現在は、駐日セルビア大使館に保管され、先日行われたセルビアの独立記念日のレセプションの際に会場に飾られていた。



JICA事務所から見たベオグラードの旧市街

震災から数ヶ月は、実に多くのセルビア人からお悔やみと励ましの言葉をかけてもらったが、セルビア人が一様に感心していたのは、被災地で食料や水をもらうためにじっと行列を作っておとなしく待っている日本人の姿であった。セルビアだったらきっと食料や水の取り合いで暴動が起きているに違いないのに、このような時でも秩序を忘れずに整然としているという日本人の姿に多くのセルビア人が感銘を受け、これまで幾多の困難から立ち直っている日本なら、必ず今回もすぐに立ち直るに違いないと確信したという話をいろいろな機会に聞いた。因みに、震災直後の4月に、1万人近い市民が集まってベオグラードで開かれた日本支援イベントで、サクラの苗木1000本を希望者に配付したところ、一本の苗木を巡って参加者同士が争う光景も一部見られ、被災地では日本人が整列して飲料水や食料の配給を受けとっているのに、被災地を支援するためのイベントで何故セルビア人はこうなのか、と自嘲するニュースもあった。

こうした親日感情の要因としては、①2000年以降の日本による多額の支援、②日本文化に対する関心、③1990年代の紛争時代の中立的な対応への感謝という3つの理由があるとされている。日本の文化について言えば、セルビアで誰もが知っているという日本人の名前は黒澤明と村上春樹であり、そのおかげで、私もすぐに名前を覚えてもらい得をさせてもらった。しかし、それ以上に有名な日本人は、明石康氏である。ボスニア紛争時の旧ユーゴ問題国連事務総長特別代表として、当時、国際社会の中でセルビアが悪者扱いされている中で、紛争当事者であるボスニア系、セルビア系、クロアチア系住民に対して平等に対応する姿勢をとったことが、セルビア人から高い信頼を得る結果となったと言われている。明石氏にその話をするたびに、同氏は、自分は国連として当たり前のことをしただけであるという謙遜されるが、国際社会の様々な圧力や駆け引きの中で、信念を貫くには相当の困難を伴ったであろうことが容易に想像される。



2011年8月、無償資金協力による
機材供与の引渡し式（ノビサド市）

JICAに30年近く勤務して、その間、ラパス（ボリビア）、ニューヨーク、ジュネーブ、ベオグラードと4箇所に計10年在勤した。どの国もそれぞれに良さがあり、どこが一番良かったか答えるのは難しいが、素朴でホスピタリティにあふれる国民性と親日感情に加えて、震災の際に受けた多くの激励の言葉に、セルビアが一番と思わずにはいられない。日本では殆ど知られていないセルビア。少しでも多くの人に理解してもらうことが、私にできる恩返しだと思う。EU加盟に向けて、また、国際社会での正当な評価を取り戻すまでには、コンボとの関係や、国内の経済問題、環境問題等々、乗り越えるべき課題は山積しているが、「これまで幾多の困難から立ち直っているセルビアなら、必ずこれらの問題を克服するに違いない」と確信したい。



2011年3月の東日本大震災の際に届けられた
支援メッセージの書かれた日本の国旗
(2013年2月15日の
セルビア独立記念日レセプションにて)